
カモは机の上で鳴く

蛙太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カモは机の上で鳴く

【Nコード】

N67130

【作者名】

蛙太郎

【あらすじ】

机の上にあるカモの置物。それにまつわる、不思議な短い話です。

僕の部屋には一つ机がある。窓は二つ、電気も二つ、椅子も二つある。でも、机は一つだった。特にそれに意味はない。

僕はその日、椅子に座ってぼうつとしていた。特に考えることはなかったし、考えたくもなかった。だから、ただ、ぼうつとしていた。椅子に座った僕は、なぜだか椅子を二つ使っていた。左のおしりを左の椅子へ、右のおしりを右の椅子へ。ちょうど半分ずつ腰掛けて。

ぼうつとしていたからそう座ってしまったのかもしれないし、もしくは、そう座ってしまったから、ぼうつとしていたのかもしれない。でもそれが分かったところで、何にもならないだろう。取り立てて気にすることでもない。

その部屋には、ペパーミントの香りがほのかにただよっていた。僕はペパーミントが好きなのだ。だから鉢にペパーミントを植えている。週に一度、僕はペパーミントを摘む。それを机の上に、ガラスのコップに入れて置く。そうすると頭の中が、すっとするのだ。爽快な気分になる。そこでふと、僕はペパーミントが好きになったちよつとした理由を思い出した。

僕は根っからの鼻づまりで、むかし子供の頃、親が僕の鼻にペパーミントを挿した。そうすれば、鼻づまりが治ると信じていたのだ。僕の鼻にはペパーミントがつまっていた。しかし鼻づまりは治らず、ペパーミントも鼻につまったままだった。ペパーミントはもちろん鼻から取ってもよかったが、取らなくてもよかった。頭の中がすつと、爽快だったから。そして僕は、取らない方を選んだ。僕のペパ

ーミント好きはその頃からだった。

僕の部屋の机の上にはカモがいる。置物のカモだ。親指くらいの大きさのカモが一羽、小指の第一関節くらいのカモが二羽いた。たぶんどこかの土産物屋で売っていたものだ。僕はあまり旅行には出なかったで覚えていてもよさそうだったが、それはどこで買ったのか覚えていなかった。見るからに偽物のように作られた、偽物のカモだ。木でできているようにも見えるが、プラスチック製だろう。僕はぼうつとそれらを眺めた。それは習慣と言ってもいい行為だった。なぜなら、ときどきそれらは鳴くのだ。声の出し過ぎで声が出なくなったオペラ歌手のように、クワツ、クワツ、と。

本当のカモがそう鳴くかは知らない。アヒルがそう鳴くような気もする。ただそいつらは、クワツ、クワツ、と鳴く。

僕はちよつとした気まぐれで、そいつらに話しかけた。

「置物のカモが鳴くなんて、変だよ」

小指の第一関節大の二羽が、クワツ、クワツ、と鳴いた。親指大の一羽は黙ったまま、僕の顔を見つめていた。何か思案するようなカモなりの深い顔だった。

しばらくしてそのカモが言った。

「おまえ、しゃべれたのか？」

クワツ、クワツ、という以外の言葉を聞いたのは、それが初めてだった。僕はその言葉について少し考えた。どういう意味なのだろう。しかし答えは浮かばず、カモを見つめたまま僕は黙った。次の

言葉を待ったのだ。大きいカモは、その沈黙を理解したかのように言った。

「わしらはときどき鳴いていたが、おまえは一度も口を開いたことはなかった。てつきりしゃべれないものだと思っていた」

言われてみれば、僕が口を開いたことは一度もなかった。カモにそう思われていても仕方のないことだった。しゃべれるカモの置物、しゃべれない人間。もしくは、僕も置物に見られていた可能性もある。

「でも実際、僕はしゃべれる。人間だから」そう言ってカモの言葉を待った。

「そうみたいだ。少し驚いている」カモは言った。

そしてカモは大きく息をした。したように見えた。置物だから分らない。次の言葉からそう予測したのかもしれない。

「それにしても良い香りだ。なんだ？ その草は」カモは机の上のコップを見て言った。

「それはペパーミント。ハツカだよ」僕はそう言つと、大きく息を吸った。

いつもよりずっと、爽快な香りだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6713o/>

カモは机の上で鳴く

2010年11月2日23時40分発行